

邪馬台国は蓬莱の地だった たかみやしんじ

「82年生まれ、キム・ジヨン」(著者 チョ・ナムジュ)という小説が韓国で2016年に発売され、ミリオンセラーになっているという。又、話題が沸騰する中で映画化も決定された。既に台湾ではベストセラーになり、ベトナム、イギリス、イタリア、フランス、スペインなど16ヶ国で翻訳が決定している。日本においては、2018年12月に斎藤真理子氏の翻訳で発売され注目が高まっている。

主人公のキム・ジヨンは33歳、夫と子供とソウルで暮らしていた。子育て中のある日、別人に憑依するなど異常な行動をとるようになってしまう。物語は精神科医に語った、幼少期、学生時代、そして会社でも男性が優先され、子育てのために退職を余儀なくされた自身の半生を精神科医のカルテという形で綴られる。

NETに世界149ヶ国の男女平等度ランキングが掲載されている。発信者は不詳だが、社会進出や政治参加などにおける男女間の平等度を表す。又、経済・政治・教育・健康の分野において、男女格差をどの程度埋めているかを調査していると説明している。これによると、中国は103位、日本は110位、韓国は115位といずれも下位に位置している。(2019年1月更新)

これらの国々が何故に低位置に在るのかは専門家の分析を待たなければならないが、韓国については李氏朝鮮時代(1392年~1897年)に形成された家父長的な家族制度が大きく影響しているとされている。しかしながら、高麗時代(936年~1392年)から続いていた、結婚すると夫が妻の家で妻の両親と暮らす「男婦女家婚」という婚姻制度が16世紀頃までは一般的だったようである。

この「男婦女家婚」と似たような風習をタイの田舎の結婚式に出席して体験したことがある。タイ人の女性と結婚した日本人の男性だが、女性の実家の一角に新居を与えられる。結婚した二人がそこに住む訳ではないが、二人のものということらしいのである。

結婚式当日、男性側の参列者は花嫁の実家から少し離れた場所で隊列を組む。先頭は花婿とその両親で、豚の形をした飾りケースに札束を忍ばせて待つ。そして、花嫁側の準備が整うと実家に向かい何やら大声を張り上げて進んで行く。実家の前に到着する。しかしながら、家の入口は紐で塞がれていて通れない。そこで、交渉人が登場して何やら話し合いが行われる。そして、豚の飾り物を渡すと紐が外され、花婿をはじめとして皆が家にはいることができるのである。その後、結婚式の儀式が展開されることになる。

魏志高句麗伝にこれと似た話が伝わる。“婚姻が決まると女の家では母屋の後ろに婿家を作る。婿は日が暮れると女の家に行き、銭と布地を積んで小屋に泊まらせてもらう。そして子供が生まれて成長すると妻を連れて家に帰る”と記載されている。

日本においても、平安時代の貴族社会では「通い婚」といって、夜間に正室以外の妻の家に行って契りを交わすことが一般的だったという。

問題は、どのようにしてタイ国から東アジアにかけての広域にこのような風習が伝わってきたかである。従来、中国江南地域の人々が稲作などの新技術・文化などを帯同して朝鮮半島や日本に渡来してきたとされている。しかしながら、上記に掲げた婚姻の風習はもっと広域の視点で物事を考えなければいけないとも言っているのだが…。

序章 東夷伝の語る国々

中国・西晋の時代に歴史家陳寿の撰によって書かれた「三国志」という歴史書がある。「魏書」30巻、「呉書」20巻、「蜀書」15巻の計65巻から成る。そして、「魏書」の巻30に烏丸鮮卑東夷伝がある。これには、烏丸・鮮卑・扶余・高句麗・東沃沮・濊・韓・倭人などのことが記されている。この倭人の条が所謂「魏志倭人伝」と言われているのである。以下に各国の印象的な記述を抜粋してみる。

イ) 魏志・韓伝

韓は帯方郡の南にある。東西は海をもって限りとなし、南は倭と接す。およそ四千里四方。一は馬韓といい、二は辰韓といい、三は弁韓という。辰韓は古の辰国である。

馬韓は西に在る。その民は土着し、種をまき植える。養蚕を知り、絹わたや布を作る。その風俗は、規律が少なく、国邑に統治者がいるとはいっても、村落は入混じり旨く制御することができない。跪いて拝む礼はない。住居は草の屋根と土の部屋を作り、形は盛り土のようである。その戸は上にある。家をあげてその中に住んでいる。長幼や男女の分け隔てはない。葬る時、棺はあるがその外側の入れ物の槨はない。牛馬に乗ることを知らず、牛馬は死を送るのに尽くしてしまう。

辰韓は馬韓の西にある。その古老は代々伝えて次のように言う。“いにしへの逃亡者で、秦の労役を避けて韓国にたどり着き、馬韓がその東の外れの土地を割いて与えたのだと。”国には鉄が出て、韓、濊、倭がみな、従ってこれを取っている。諸の市買ではみな、中国が銭を用いるように、鉄を用いる。また、楽浪、帯方の二郡にも供給している。男女は倭に近く、入れ墨をしている。その風俗では、道を行く者が出会った時、みな立ち止まって道を譲る。

弁辰は辰韓と雑居する。城郭がある。衣服や住居は辰韓と同じで、言語や法俗も似ている。鬼神を祭ることに違いがあり、かまどは家の西側に作る。弁辰の瀆盧国は倭と界を接している。十二国には王がいる。その人はみな大柄である。衣服は清潔で、長髪。また廣幅の細かい布を作る。法俗は特に厳しい。

ロ) 魏志・濊伝

濊は南は辰韓と、北は高句麗、沃沮と接し、東は大海に窮まる。今、朝鮮（楽浪、帯方郡）の東はみな濊の土地である。

その昔古老は自ら高句麗と同種だと言っていた。その人々の性格はまじめで慎み深く、貪り欲しがるとは少ない。恥を知る心があり、高句麗を頼ったりしない。季節ごとに郡にきて挨拶した。二郡は軍事遠征や税の賦課があるので、人員を供給したり使用したりして、これを二郡のように扱っていた。

ハ) 魏志・東沃沮伝

東沃沮は高句麗の蓋馬大山の東にあり、大海のすぐそばに住んでいる。大君主はおらず、代々集落それぞれに統率者がいる。その言語は高句麗と大体同じだがところどころ小さな違いがある。

国は小さく、大国の間に押し詰まっているので、ついに高句麗に臣属した。高句麗はその中に大人を置き、使者（高句麗の下級官名）となして統治させた。また大加（高句麗の大官）に租税を取り立てさせ、布・魚・塩・海産物は千里を担いで高句麗に届けられた。また、沃沮の美女を送って召使にしたが、奴隷のように扱っていた。

二) 魏志・高句麗伝

高句麗は遼東の東千里にある。南は朝鮮、濊と、東は沃沮と、北は夫餘と接している。丸都山のふもとに都をおく。

その風俗は食を節約し、屋敷を手入れするのが好む。人々の性格は凶悪、短気で略奪を好む。その国には王がいる。尊卑のそれぞれに等級がある。

その国中の豪族は耕作せず、居ながらにして食するものは万余人で、下戸は遠くから米や魚や塩を担いでこれに供給する。その人民は歌舞を喜び、国中の集落では夕暮れになると男女が群れ集まって歌ったり遊んだりしはじめる。

その風俗では、婚姻する時話が決まると女の家では母屋の後ろに小屋を作る。これを婿屋と言っている。婿は日が暮れると娘の家に行き、戸外で名を名乗り跪いて拝み、娘と一緒に泊まらせてくれるように頼む。これを再三繰り返す。娘の父母はこれを聞き入れて小屋の中に泊まらせる。かたわらに銭と布地を積む。生まれた子が成長してから妻を連れて家に帰る。

男女の風俗はみだらである。男女は結婚すると少しづつ死に装束を作り始める。手厚く葬り、金・銀・財産は死を送るのに使い尽くす。石を積んで封じ、松と柏を並べて植える。

高句麗人は気力があり戦闘になれている。沃沮や東濊はみな支配下にある。また小水貊がある。高句麗は大きな川のほとりに住んでいる。西安平阜の北に小さな川があり、南に流れて海に入っている。高句麗の別種が国を作っており、小水貊と名付けられている。良い弓を産出する。

木) 魏志・倭人伝

倭人は帯方郡の東南で、大きい海の中にいる。山や島によって国や邑を形成している。もとは百余国あった。漢の時代に朝見してくるものがあった。帯方郡から

女王国（邪馬台国）に至るまで1万2千余里ある。

男子は大小に関わりなく皆顔や身体に入れ墨をしている。夏后少康の子が会稽に封じられると髪を切り入れ墨をして蛟龍の害を避けた。その行路の里数を計算すると（倭人国は）会稽・東冶（冶）の東にあることになる。

死んだ時には（葬るのに）棺はあるが槨はない。土を積み上げて冢を作る。その習俗では、行事や往来する際に骨を焼いて占トを行って吉凶を判断し、その結果を伝える。その言葉は中国の令亀の法と同じである。

その風俗は乱れていない。人々は長寿である。国の大人は4～5人の妻をもつ。下戸でも2～3人の妻をもつものがある。夫人は淫せず、嫉妬することもない。盗みをせず、訴訟も少ない。尊卑にはそれぞれ序列があり、互いによく服従する。

女王国の東には海を渡って千里いくと又国があった。それらもみな倭の種族であった。倭の地を詳しく調べ尋ねれば、大海の中に離れた洲島の上にあり、離れたり連なったりしている。ぐるっとまわればおよそ5千里ほどである。

魏志・東夷伝は凡そ1700年前に書かれたものとされるが、現在の国情と似ている記述が散見されて面白い。

高句麗や東沃沮は現在の北朝鮮ということになる。高句麗は良い弓を産し、性格は凶悪、戦闘に強いと言っている。現在の北朝鮮の国力は韓国の50分の1、米国の1100分の1と言われるが、核保有をベースにこれらの国と堂々と渡り合っている。又、高句麗の人民は歌舞を喜び、男女の風俗はみだらであると言っている。現在、北朝鮮には喜び組というものがあると言われている。特に歌舞組が著名で、いろいろなイベントなどでその活躍が報道されている。又、東沃沮は高句麗の支配下にあったが、布や海産物を高句麗に届けていた。更に、美女を送って召使や奴隷として扱っていたというのであるが、この美女たちは沃沮の人々だけだったのであろうか。

馬韓の風俗は、規律が少なく、国に統治者がいても旨く制御することができない。跪いて拝む礼がないと言っている。現状の韓国の大統領は政権移譲すると殆どが抹殺されているようである。又、政権を握っている間も一部団体等の動静を統制できないようである。

さて、魏志倭人伝に関してであるが、魏志韓伝において弁辰の瀆盧国は“倭”と界を接しているという記述があり、又、魏志倭人伝においては郡より“倭”に至るには韓国を歴てその北岸、狗邪韓国に到ると記述されている。一方、魏志倭人伝では倭人“は

帯方東南の大海の中にありと記述されている。又、女王国の東渡海千里にしてまた国あるも皆”倭種“なりと記述されている。

この“倭“、“倭人“、“倭種“とはどういう人々なのだろうか。本稿では、これらの定義づけを明確にすることによって、邪馬台国の位置を決定せんと目論んでいる。

第一章 畿内説か九州説か

邪馬台国所在地論争は、江戸時代から実に300年も続けられているが未だに決着をみない。その主因は、帯方郡から邪馬台国に至る里程の記述が曖昧であることだろう。研究者はその曖昧な部分を“ある想定”で解決して邪馬台国の場所に導くのであるが、“ある想定”は限りなく多く、又、多くの研究者は自説を曲げず他説を信じない。こうして、邪馬台国所在地論争は相変わらず続けられているのである。

この里程から導こうとする邪馬台国所在地論は、所在地論の基調に位置付けられるたいへん重要なものではあるが、どうもそれだけでは結論に至りにくいように考えられることから、里程論と別の観点とを結びつけて、本当の邪馬台国の所在地に導く諸論が展開される。卑弥呼論、台与論、狗奴国論、土器論、鏡論、丹論などなどである。しかしながら、それら諸論も決め手を欠くことから、なかなか邪馬台国の所在地に行き着かない現状であるということではなからうか。

そこで、本稿では里程論とは別の視点で邪馬台国に行き着きたいと考え、序章にて若干触れたところの“倭”、“倭人”、“倭種”とは何かを明確化することで邪馬台国に迫ってみたいと思っている。

魏志・韓伝及び魏志倭人伝によれば、倭は朝鮮半島の南端に在った。そして、幾つかの国を形成していたのであろうが、それらの一つに狗邪韓国があったということだと考えられる。しかもこの倭は、明らかに帯方東南の大海の中にある倭人と区別されて記述されている。

「倭」について初めて記述された中国の歴史書は、後漢の学者王充が著した「論衡」と、後漢初頭に歴史家班固らによって編纂された「漢書」地理誌とされている。「論衡」には、“周の時、天下太平にして、倭人來りて暢草を獻ず”と記されている。周の時代は紀元前1100年から紀元前256年であったとされている。周王朝は鎬京（現西安市）に都を置いたが、王朝内の覇権争いから前770年に洛邑（現洛陽市）に遷都する。この前期を西周、後期を東周と呼んでいる。東周の時代は春秋戦国時代と重なり、やがて前221年秦により中国が統一される。

さて、「論衡」に記述される内容についてであるが、周の時代で天下太平と言っているので、時代は西周の時のことであろう。この時周王朝に倭人が暢草を獻じたのである。暢草は薬草で酒に浸して服用されたものらしい。産地は中国呉越地方（揚子江の下流域）の南付近とも言われている。紀元前770年以前に倭人が中国南部産の暢草を周王朝に獻じた。この倭人が日本人とは到底考えられない。この頃中国東沿岸部は東夷と呼ばれていた。従って、それらの中の1国（或いは1部族）に倭人と呼ばれる人々が居て、周

王朝に朝献したものと考えられる。

中国の最古の地理書とされる「山海経」というものがある。戦国時代から秦代、漢代にかけて徐々に付加執筆されて成立したものと考えられている。「山海経」に倭の記述がある。“蓋国は鉅燕の南、倭の北に在り、倭は燕に属す”。

この頃（中国・戦国時代）の朝鮮半島では、北側に燕、中央に蓋国、そして南側に倭があった。ここに記述される倭は時代的なことを考慮するならば、「論衡」に記述される倭人と同一の人々と考えられる。ということは、南越の人々がその文化・技術などを帯同して朝鮮半島に移ってきていたということになる。そして、魏志倭人伝では朝鮮半島の南端に倭の狗邪韓国があったと記される。ということは、紀元前700年頃から紀元200年頃まで、この地に倭が居住していたということになるのである。

一方「漢書」では、“楽浪海中に倭人あり、分かれて百余国、歳時をもって来りて献見すと云う”と記される。楽浪郡は今の北朝鮮平壤付近にあった。前漢の武帝が紀元前108年に設置した直轄領4郡の一つである。この楽浪郡のあった海の中に百余国の倭人が居たと言っている。

「漢書」王莽伝の記述。平帝の元始4年（紀元4年、平帝13歳で王莽の傀儡政権下）、東西南北の国が貢献をする中に“東夷王度大海奉國珍”という一文がある。東夷の王が大海を渡るの、これは日本列島に住む倭の王と考えられる。献上した物は、暢草ではなく、國珍であった。

「後漢書」東夷伝の記述。“建武中元2年、倭奴國、奉貢朝賀す。使人自ら大夫と称す。倭国の極南海なり。光武、賜うに印綬をもってす”。この建武中元2年（紀元57年）に倭奴国王が光武帝から授けられた金印と思われるものが、福岡県の博多湾にある志賀島から出土した「漢委奴國王印」とされる。

そして、魏志倭人伝では、“倭人は帯方東南の大海の中にあり。山島に依りて国邑をなす。旧百余国。漢の時に朝見する者あり。今使訳通ずる所三十国なり”と記述される。

又、魏志倭人伝では、“其の（女王国の）南に狗奴国あり、男子を王となす。女王に属さず”、“女王国の東には海を渡って千里いくと又国があった。それらも皆倭の種族であった”と記述されている。この件、「後漢書」では、“女王国より東、海を千里渡ると狗奴国に至る。皆倭種といえども女王に属さず”である。狗奴国の位置については記述が異なるものの、女王国の東方向の海を千里渡ると倭種の国があることには相違がない。

以上を総括すると、紀元前500年から紀元200年の頃、朝鮮半島の南部には倭が居住していた。そして、狗邪韓国など幾つかの国が形成されていたのではないかとと思われる。又、楽浪郡や帯方郡の東南方向の海の中には、倭人が居住していた。以前は百余国の国々があった。今は三十国位の国が認識される。これらの国々は東夷と呼ばれていた。その一国、倭奴国王が漢の光武帝から金印を賜り、その金印が九州・博多の志賀島

から発掘された。又、倭人が居住していた国々から海を千里渡って行くと、倭種の国がある。

このように見えてくると、邪馬台国は九州以外の地は考えられない。又、九州以外の倭種の国も、せいぜい海を千里渡った所位の認識であり、四国の一部か瀬戸内・山陰地方の一部程度の範囲が想定される。倭種の国とはそこら辺の認識と思われ、今のところ、倭種の国は畿内にはほど遠く、到底届かないのである。

第二章 太伯と徐福

第一章の記述により、邪馬台国は九州のどこかにあったと考えられる。しかしながら、第一章で論じた倭、倭人、倭種はもともと中国江南地域の人々が朝鮮半島や日本列島に渡来して築いてきた国々であり、その時代は文献的には紀元前500年頃から紀元200年頃ということになるが、渡来はもっと時代が遡る可能性があることも考慮に入れておく必要がある。

外国人の朝鮮半島や日本列島への渡来は、長期にわたって断続的に行われていたものと思われる。多くの渡来人たちは、先人たちの採った道（航路）を辿り、先人たちの着いたところに辿り着く。こうして、倭、倭人、倭種が形成されていった。そして、時代を形成するような大きな渡来は、中国の春秋戦国時代からとされている。

中国の春秋戦国時代とは、西周が都を鎬京から東の洛邑へ遷した前770年から秦の始皇帝による全国統一の前221年までとされる。封建制を社会システムとしていた西周の崩壊は、世の中の秩序を乱す序曲となった。それまで周に従属していた諸侯国が次世代の頂点を目指して戦争が繰り広げられることとなる。これらの中で強力な権力を有した諸侯は「覇者」と称された。そして、「覇者」は当時政治の中心とされていた“中原”（黄河の中・下流域）を目指すこととなる。

この頃、“中原”では周や晋、鄭などが国を建てて覇権を争っていたが、その地を虎視眈々と狙っていたのが、楚であり、長江下流域に興った呉や越であった。

前506年、呉が楚を攻めて“中原”進出を画策するが、今度は越が呉をつけ狙い、前494年、呉王夫差が越王勾踐を会稽で打ち破る。しかしながら、勾踐はこれを恥と捉え忍耐を重ねて、前472年遂に呉を討つことに成功する。呉を滅ぼした勾踐は都を現在の江蘇州連雲港に遷し、江蘇州から浙江省にいたる広大な地を治めることとなった。しかしその栄華も永くは続かず、6世孫の無彊の代には楚によって滅ぼされる。前334年のことである。

「史記」によれば、姫姓の呉は周の太伯の建てた国である。太伯は周王の座を弟に譲り自身は現在の江蘇州界隈に呉を建てた。この呉と長年抗争を繰り広げるのが、浙江省界隈を本拠地とする越であった。前472年越王勾踐は呉を打ち破り、都を江蘇省連雲港に遷した。このことは、戦いに敗れた呉の王族・貴族たちの退路がないことを意味し、彼らは海路北上することとなる。

魏の吏官の魚豢の著した「魏略」には、倭人の記載として“自謂太伯之後”という伝聞がある。つまり、倭人は自分たちが呉の末裔であると称していたのである。

越に敗れた呉の王族・貴族たちはその民と共に海に逃れ九州に辿り着いた。やがて倭の宗主国となり、後漢に朝貢し光武帝より金印（「漢委奴國王印」）を賜ることとなる。

中田力氏が著書「日本古代史を科学する」の中で、人間の染色体のグループ分析を記述されている。それによると東アジアにはY染色体Oハプロタイプが多い。又、米作りのグループ（O₂グループ）は稲作国家に広がっている。このグループは更に O_{2a} と O_{2b} に区別される。日本と韓国の O₂グループは O_{2b} だが、中国には殆ど存在しない。このことは、弥生時代を形成した人々が O_{2b} グループであったことは確定的で、その人々は中国本土を離れていることを示している。

又、米の遺伝子にも言及しておられる。それによると、日本の稲の品種“温帯ジャポニカ”は長江の中流域で生まれ、それが長江河口、デルタ地帯に広がったとされている。そして、この地方で栽培されている稲の60%は（RM1-b）遺伝子である。日本で栽培されている稲、特に九州から本州南部はこの遺伝子が多い。ところが、朝鮮半島で栽培されている稲にはこの遺伝子が見つからない。これらのことは、“温帯ジャポニカ”を帯同した弥生人は朝鮮半島経由でなく、直接九州に上陸したことを示しているというのである。

さて、先に記述のように「魏略」では呉の末裔が九州に上陸して奴国を建てた可能性が濃厚である。しかしながら、「魏志倭人伝」において編者の陳寿は「魏略」の多くを引用しているにも拘わらず“自謂太伯之後”を引用していないのである。このような軽率なミスは陳寿が犯すはずがなく、この「魏略」の記述は倭人に関するものではあるが、邪馬台国の時代でなくもっと遡った時代のものであること、即ちそれが博多の奴国の伝聞であることを見抜いていたものと考えられるのである。

奴国王が後漢光武帝から金印を賜ったのが紀元57年のことだった。そして、邪馬台国卑弥呼が、紀元238年に魏朝から親魏倭王卑弥呼として金印を賜るのである。しかしながら、奴国と邪馬台国はどうも同一の国ではなく、又、継承している国でもないようである。とすれば、邪馬台国にも奴国とおなじような成立過程があったのではないかと考えられるのである。

そのような観点で中国の歴史書を紐解くと、唯一該当するような出来事がある。それこそ、一般に言われる“徐福伝説”である。秦の始皇帝の時代（在位：紀元前246年～紀元前221年）、方士徐福に率いられて日本に渡来した技術者や童男女三千人がいたのである。

後漢書の記述。“会稽郡の海外に東鯤人がいる。分かれて二十余国を作っている。又、夷州と澶州がある。秦始皇帝は方士の徐福を派遣し、子供の男女数千人を率いて海に入り、蓬萊神仙を求めさせたができなかった。徐福は罪に問われるのを恐れて敢えて帰らず、つ

いにこの島に止まった。代々受け継がれて数万戸ある。”

この蓬莱神仙とは一体何のことなのだろうか。一般的には、中国の古代（戦国時代）において方士（神仙術を行う人）によって説かれた三神山（蓬莱・方丈・瀛州）の一つで、山東地方の東の海中にあり、仙人が住み不死の薬を作っていた。宮殿は金玉、白色の鳥獣がおり、玉の木が生えている。近づけばどこかへ去り、常人には至りえないところと解説されている。

中国の戦国時代によって説かれたのであるから、蓬莱山の伝承は戦国時代をもっと遡る時代のことと思われる。そして、山東地方の東の海というから、近くは黄海か東シナ海辺りが浮かぶが更に遠方をイメージすれば日本列島ということになる。仙人が住み不死の薬を作っていたというのは、仙人のように長い髭の人たちが大勢いて恰も長寿の薬を服用しているかのようであったと解してみたらいかがであろうか。

この地（蓬莱山）は、まさしく“縄文時代の日本列島”ということになるのではないだろうか。例えば、三内丸山遺跡に朝日が昇ってきたら、それは金玉の宮殿に見えたに違いない。蓬莱の地には白鳥や白鹿が群れていた。翡翠の勾玉を樹木に吊るしたらそれは玉の木が生えているように見えた。それは神聖な祈りの時だった。

日本列島における、およそ1万5千年前から3千年前の1万年を超える期間を縄文時代として時代区分している。そこでは時間は緩やかに流れ、縄文人が豊かな生活を営んでいた。この東の海中の日本列島の縄文人の見聞が何らかの形で、相当美化され誇張されて中国に伝わった。それが神仙の正体ということではないだろうか。

この神仙の地（＝日本列島）を徐福は目指した。技術者・童男女数千人を引き連れて徐福はこの地を目指した。そして、その目的は不老不死の仙薬を探し出して秦の始皇帝に捧げることだった。

この歴史的事実をどの位の古代史家が信用しているかということを見ると甚だ心もとない。それは神仙思想ということそのものに現実味が乏しいことが大多数の方々の思うところであろう。それに加えて、薬草探しに数千人規模で、あるかないか分からない東の海を目指したというのであるから、真剣な歴史議論になじまないと思われることは無理からぬことであろう。

しかしながら、徐福の時代を200年ほど遡る、前472年には越に敗れた呉の人々が北方（＝日本列島）を目指した事実が伝承されていたものと考えられる。とすれば、何かの目的をもって数千人が出帆するという事は、それほど非現実的なことではない。問題は不老不死の薬草探しということになる。そこで、徐福出帆の本当の目的が何であったのかという議論が行われなくてはならない。

有力な幾つかの説がある。一つは“徐福が日本の地に旅立ったのは、ある国の復興或いはある家系を守ることを意図したのではないか。そのために、技術者や童男女を大勢同行し、長期的に国を興そうとした。”というものである。しかしながら、徐福の渡来

は1回ではなく、実績報告に戻って又船団を派遣するということが数次行われていたらしいことが分かってきた。とすれば、仙薬探しだけの理由で始皇帝を欺き通すことが果たしてできたであろうかという疑問が生ずる。

又、別の説では、“仙薬探しは表向きの口実で、徐福船団の規模や日本で不老不死の薬草が見つからなかったことから、仙薬探しが至上の目的ではない。当時の秦は北方の隣国「胡」の脅威に対する作戦から、東海の島・日本列島への集団渡海であって、徐福は始皇帝が命じた倭の王であった。”とされている。西に万里の長城を築いた秦の始皇帝である。東を安堵して北の「胡」に対峙したということであろうか。しかしながら、それにしても規模が過少で、時間もかかり過ぎのきらいがある。何よりも、徐福が日本列島にきて見たとすれば、秦国が脅威を感じるような国でないことはただちに理解できたはずである。

最後に本稿の推論を示すこととする。徐福一行の渡来の目的は、“鉄材を探す”ということではなかったか。不老不死とは始皇帝個人の不老不死ではなく、秦国の不老不死で秦国の永遠の繁栄を意味した。その仙薬が鉄材ということであったろう。徐福は鉄材を探し、秦国に供給するという密命を帯びて派遣されたのではないだろうか。

そのように考えることで追加の船団の派遣を要請したことの意味もよく分かる。即ち、日本列島は九州だけでなく、東の方向にもっと連なっていることが分かったので、更に調査の手を広げる必要があると説いたということではないだろうか。

第三章 徐福伝承地

日本に渡来したのではないかと思わせる徐福伝承地が、実に日本各地30数か所にあると言われている。2千2百年の時空を超えて伝わるこれらの徐福伝承こそ徐福渡来の証と言えないだろうか。

それらを繋ぎ合わせると、先ず徐福一行は佐賀県諸富町に着地する。そして、九州一円に“不老不死の仙薬”を尋ねる。その後、日本海側ルートと太平洋側ルートに分かれて進んで行くのである。

佐賀市金立町にある金立神社には、徐福一行が諸富町に上陸しようとしている情景の絵図が収められているという。伝承によれば、徐福一行は海路有明海から賑やかに歌舞音曲を奏でながら上陸した模様である。鹿児島県串木野市。徐福は冠岳で封禪の儀式を行ったと言われる。宮崎県延岡市。徐福岩と呼ばれる石柱が存在する。福岡県福岡市博多区、名島神社。徐福上陸地との伝承がある。

日本海側ルートでは、京都府丹後半島伊根町の新井崎神社に徐福上陸の伝承がある。更に北上し、秋田県男鹿半島、青森県小泊に定着しそれぞれの地で伝承を残した。徐福一行は何故このような最果ての地まで行ったのであろうか。男鹿半島といえば“なまはげ”が想起される。一説によれば大陸女真族の侵略・略奪のことを表わしているともいう。又、青森県といえば三内丸山遺跡が想起される。この地は縄文時代大いに栄えた地だった。そのように考えると、これらのことは秦の時代の中国に何らかの形で伝わっていたのかもしれないのである。

太平洋側ルートでは、和歌山県新宮市が著名である。「富士古文書」によれば、徐福は紀伊国大山に3年3ヶ月滞在し彼の地を拓いたという。新宮市には阿須賀神社があり徐福宮が祀られている。「富士古文書」は山梨県富士吉田市に住む宮下家が保管していることから「宮下文書」とも言われる。そしてそれは、東渡した秦の徐福が編纂したものであると伝わる。これによると、富士山南麓の不二高天原における日本の超古代史のこの記載があるという。又、「富士古文書」には、富士山東麓から現在の神奈川県全域が相模であったように記載されている。そのことを裏付けるように神奈川県藤沢市の妙善寺にある福岡家の墓碑に徐福の記載があるという。東京都八丈島の徐福伝説。秦始皇帝の命を受けた徐福は仙薬を手にすることができず紀州熊野に留まり、徐福に従ってきた童女500人の船は八丈島（女護島）に、童男500人の船は青ヶ島に着いたと伝わる。

さて問題は、上記のように日本各地に残る徐福伝説のことが記紀には殆ど著されないことである。

これだけ多くの徐福伝説が残っているということは、それが史実であったからか、誰かが何かのために創作したということになるだろうが、後者だとすればそれによってメリットを享受したことが日本史に現れないとならないがそのような形跡は今のところ見当たらない。

では、史実とした場合に記紀に徐福一行の記述が著されないのは何故だろうか。その理由を問えば、日本建国に徐福一行が関係していることを記述しなくなかったということになる。逆に言えば徐福一行こそ日本建国の主流であったということになるのではないだろうか。

そのような観点から徐福伝承地を分析すると、気になる点が3か所ある。一つは九州地区の中で大分県に伝承がないこと、二つは新潟県が飛んでしまっていること、三つは相模地区・八丈島あたりで伝承が途絶えていることである。

大分県（宇佐）については、本欄の小稿（「建御雷神は大歳尊だった」）で論じたように、スサノオが政庁を置き天照大神の幽閉に及んだ地だった。一般的にも宇佐神宮の鎮座する地であり、祭神として祀られるのが応神天皇・宗像三女神・神功皇后となれば日本建国史に大いに関わりの深い地とされなくてはならない。しかしながら、徐福伝承は語られることがない。

新潟県（糸魚川市）については、同じく上記の小論で記述したところであるが、ここは徐福一行が土着した地でありその末裔が月読命と分析した。一般的にも糸魚川市境界は縄文時代から翡翠の産地として隆盛した地域だった。このような地に徐福一行が着地しないはずがない。実は、この地から内陸に入ったと考えられる長野県（和田峠・蓼科山）には徐福伝承が伝わっている。和田峠から霧ヶ峰・蓼科山境界は縄文時代に黒曜石の産地として大いに栄えた地であり、そうした地に徐福一行が足を延ばしたことは大いに考えられるのである。しかしながら、糸魚川市には徐福一行の伝承がない。

三つ目であるが、常陸国風土記に記述が残る。筑波郡の記述。“筑波の梟は昔紀の国と言った。昔、祖先の大神が旅の途中駿河国の富士山で日が暮れてしまった。そこで福滋（富士）の神に宿を請うも断られてしまった。大神は、我は汝の祖先であるのに何故宿を貸さぬのかと悲しがった。さて、今度は筑波の山に登って宿を請うと筑波の神は食事を用意してもてなした。こうして、富士の山はいつも雪に覆われて登ることのできない山となった。一方、筑波の山は人が集い歌い踊り、神と共に飲み食い宴する人々の絶えたことがない。”徐福伝承地・紀の国から発して徐福伝承地・富士山を経て筑波に着地した大神だが、この地に徐福伝承がない。このことは何を意味するのだろうか。

これらの地に徐福伝承がないことの意味は、記紀の描こうとした日本建国史にとって邪魔な地であったからではないだろうか。そこで記紀編纂時に権力の中枢にいた藤原家によってこれらの地から徐福伝承が抹消されてしまったのである。

以上を整理すると次のようなことになる。即ち、日本建国の祖は徐福一行であったが記紀はこれを記述しなかった。又、邪馬台国や卑弥呼のことも記紀は記述しなかった。これらのことは、徐福一行の末裔が日本建国の祖となり、やがて邪馬台国を築き上げたということを示しているのである。そして、その後邪馬台国をもとにして古代日本国が形成されていくのである。

更に記紀の編纂にあたっては、念には念を入れて、日本建国史にとって重要な一部の徐福一行の伝承地を、記紀の記述に不都合があることから歴史から消してしまったものと考えられるのである。

第4章 天孫降臨と国譲りの考察

第3章の考察により日本古代史（弥生時代）は、徐福一行の渡来ともたらされた稲作や新技術・文化などによって培われ、加速的に発展していったものと考えてよさようである。そのことは、記紀の神代記に記述されるイザナギ・イザナミの国生み・神生み神話に代表されるのではないだろうか。

徐福一行は中国から九州に渡来し拠点を築き、日本海側から又太平洋側から日本列島を北上していった。このことがイザナギに擬して記述されているのである。従って、徐福＝イザナギとしてもよいものと考えられる。

又、序章魏志・韓伝で記述したように秦の時代に韓半島に逃亡した人々がいて辰韓（後の新羅）を築いた。やがて彼らの一部が出雲に渡来し拠点を築いた。このことを記紀ではイザナミに擬して記述しているのではないだろうか。

そして、イザナギ・イザナミは夫婦の契りを交わし国生み・神生みをするのであるが、このことは両神の実際の婚姻を意味するのではなく、両陣営の国造りと縄張り造りを意味しているのであろう。やがてイザナミが亡くなり黄泉国から逃げ帰ったイザナギは、日向の阿波岐原で禊を行う。すると、左目から天照御大神・右目から月読命、鼻から須佐之男命が生まれるのである。このことの意味するのは、天照御大神と月読命はイザナギ系、須佐之男命はイザナミ系としてよいのではないかと考えられる。

ではこの3貴神の拠点はどこであったのだろうか。天照御大神は九州のどこかということであろうが、諸説あり具体的な場所は明らかではない。須佐之男命については出雲ということで異存はなさそうである。そして、月読命についてであるが記紀に殆ど記述がないことから不詳であり、諸説も余り見受けられない現状である。

そこで本稿では、第3章の記述した抹消された徐福伝承地を掘り起こす中で、上記の拠点を考察したいと考えている。

イ) 天孫降臨の考察

「古事記」の記述では、オオクニヌシの「国譲り」によって高天原による地上界の支配が確定すると、今度は統治者を派遣することとなる。天照大神が最初に指名したのは子のオシオミミであったが、オシオミミはその子のニニギの任命を提案する。そしてそれが受け入れられ、ニニギが地上界の統治者として降臨する。これが所謂「天孫降臨」と言われるのである。

本欄の小稿（「建御雷神は大歳尊だった」）において天孫降臨の新説を記述した。詳細はこれを参照願いたいだが、概要は以下のごとくである。即ち、天照大神（イザナギの娘・向津姫）はスサノオの九州侵攻により日向から宇佐に連行され幽閉されてしまった。これを記紀は“天岩屋隠れ”という。この天照大神を救出したのがオオナムジであり、オオナムジは月読命（徐福系で越国奴奈川族の長）の子であるオシオミミの子であった。越国から出て、スサノオの子の八十神と戦い戦いしながら、スサノオ出雲を攻略するのである。そして、スサノオの娘スセリヒメを娶り、宇佐で幽閉されている天照大神の救出に赴くのである。

この天照大神の救出劇に相当する物語が「日本書紀」にある。景行12年、熊襲が朝廷に背いた。そこで天皇は周芳のサバで4人の土蜘蛛を帰順させる。この時、神夏磯媛は磯津山の榊を抜いて上の枝に八握剣、中の枝に八咫鏡、下の枝に八尺瓊を掛けて恭順を示す。九州に渡っては、石窟にいる二人の土蜘蛛をさらに三人の土蜘蛛を討つ。そして、日向国では高屋宮という仮宮を建てられた。そして全ての熊襲を滅ぼすと御刀媛を召されて妃とされた。十七年の春、子湯県に行幸されて、“この国はまっすぐ日の出る方に向いている”と申された。それでこの国を日向という。

この話、「古事記」のニニギの天孫降臨の話によく似ていないだろうか。鏡は天岩屋戸の天照大神を映した。勾玉は榊に吊るして捧げたものだった。そして、日向の高千穂の峰に降り立った時、朝日のまともに射す国と言い、宮殿日向の宮を作ったのだった。その後、ニニギは木花之佐久夜毘売と出会うのであった。

この景行天皇の九州征討譚が記紀に記述される天孫降臨譚の元ネタであると認定されれば、本欄の小稿で展開した天孫降臨の新説（オオナムジによる天照大神の救出劇）

が真実性を帯びてくることになる。又、オオナムジ＝ニニギであり、日向＝宮崎県といったことも認定されることになるのである。

ロ) 国譲りの考察

本欄の小稿(「建御雷神は大歳尊だった」)で「古事記」に記述される国譲りの史実を追求してみた。そこでは国譲りを第一次と第二次に分けて考えてみた。そして、第一次国譲りは、オオナムジ(＝ニニギ)によって解放された天照大神が、霸権を出雲から日向に奪還する過程と捉えたのである。概略復習すると以下のようになる。

スサノオの子の大歳尊(＝ニギハヤヒ)はスサノオの九州連合に活躍した後、北九州を出発し瀬戸内海を制覇しつつ畿内を目指し、遂には大和入りし「大和国」を建国する。更には東海・東国にも進出し霸権を拡大していた。天照大神の出雲からの霸権奪還とは、こうした状況を覆すことにあった。

一つは、東国へのアメノホヒの派遣である。第三章で記述したように常陸国は祖先の徐福一行が拓いた地だった。それを大歳尊によって奪われてしまった。又、日本海経由で出雲族が進出してきており、就中、諏訪の地はタケミナカタにより席卷されていた。そこで、天照大神は東国に楔を打つべくアメノホヒを派遣するのである。実は、この大歳尊の東国制定のことを、「古事記」ではタケミカヅチによる国譲りとして描いているのであり、注意が必要である。従って、アメノホヒの派遣でどの位東国に楔を打てたかは不詳である。タケミナカタが諏訪の地に蟄居させられたというのは甚だ疑わしい。

この大歳尊による東海・東国征討譚の伝承が元ネタとなって「古事記」のヤマトタケルの東征物語が記述されているのではないかと疑っている。

九州征討などを果たして大和に戻ったヤマトタケルに父(景行)は直ちに東征に出発せよと命じるのだった。ヤマトタケルは最初に伊勢で叔母の倭姫命に会い、草薙剣と困った時に開けるようにと袋をもらう。そして、尾張を経て相武国で騙し討ちにあう。国造に悪い神の退治を頼まれ野に入ると火を放たれてしまうのであった。この時、叔母のくれた袋を開けると火打石が入っており、剣で周囲の草を払い火打石で向い火をつけて火を跳ね返し国造を倒したのだった。更に東へ分け入ったヤマトタケルは、走水(浦賀水道)を渡ろうとした。この時嵐にあい、船で海を渡れない。すると同行していたオトタチバナヒメが海に身を投げて嵐を鎮めるのだった。やがて、東国の蝦夷を平らげて東征を終え、足柄の山に着いた時、“吾妻はや”と妻を思い嘆いたと言われる。そして、足柄の山を経て、甲斐国、科野国を超えて尾張国に戻り着くのであった。

このヤマトタケルの東征譚、該当するような英雄が見当たらないこともあって、ヤマトタケルが創作上の人物ではないかとされたり、何人かの武勇伝の合作ではないかとされたりしているのである。しかしながら、タケミカヅチによる出雲の国譲りが東国で起こったことであり、タケミカヅチが実は大歳尊であったと解釈することにより、この不思議なヤマトタケルの東征譚がすんなりと受け入れられるのではないだろうか。又、タ

ケミカツチによる出雲の国譲りが東国で起こったとすることにより、タケミナカタが諏訪の地に蟄居させられたことの意味も、追われ追われて諏訪の地に閉じ込められたとするよりも真実味が増すのではないだろうか。

八) 国譲りの完成

天照大神による出雲からの覇権奪還作戦であるが、それは畿内を席卷すること、即ち大歳尊の築いた「大和国」を日向にもらい受けることが最終目標だったのでないだろうか。

「古事記」の記述では、カムヤマトイワレヒコの東征の一行は日向を出発し、宇佐で歓待を受けた後筑紫岡田宮で1年逗留する。そして軍備を整えて安芸国に7年、吉備国に8年かけてこれを平定し河内国にむかう。しかしながら、ここで大和豪族ナガスネヒコの抵抗にあい、紀国に迂回しそちらから大和に入ろうとするのだった。イワレヒコ一行が戦いに明け暮れていたある日、ニギハヤヒという神が訪れる。そして、天から授けられた宝物を差し出しイワレヒコに従うことになる。「先代旧事本紀」によれば、ニギハヤヒは10種の神宝を持ち32神の供を従えて天磐船に乗り、高天原から河内国に降り立つ。その後再び大空を翔け大和に移る。そして、大和の支配者ナガスネヒコの妹を妻とし当地を治めていた。後にイワレヒコがやってくると、服従を示さないナガスネヒコを殺害し自らの支配地をイワレヒコに差し出すのだった。

このニギハヤヒこそ大歳尊のことであろう。そしてイワレヒコの東征譚は大歳尊の降臨を拝借して記述しているということになる。「先代旧事本紀」によれば、ニニギとニギハヤヒは兄弟ということになっている。大歳尊(ニギハヤヒ)はスサノオの子である。そして、オオナムジ(ニニギ)はスサノオの娘スセリヒメを娶っている。この関係は兄弟といっても大きくは外していないのである。

イワレヒコは紀国熊野から「大和国」に入り、大歳尊の娘御歳姫(イスケヨリヒメ)に婿入りし、橿原宮で「大和国」の王位を継承し初代神武天皇となるのである。この婿入りを画策したのが天照大神だったと言うわけである。

終章 邪馬台国の位置

終章を展開するにあたり、第4章までの記述で明らかになったことを整理しておきたいと思う。

- i) 中国の文献に記される倭とは、朝鮮半島にあった国々と人々であった。倭人とは九州地区にあった国々と人々で古くは100余国、魏志の時代では30ヶ国で、海を隔てた東には倭種がいた。
- ii) 九州地区には主として呉人が渡来して奴国を築いた。又、徐福一行が渡来し九州

地区に国を興すと共に日本列島に進出して行った。その中の有力な一派が記紀ではイザナギとして著され、後継が天照大神と月読命だった。天照大神の拠点は日向（宮崎県）であった。

- iii) 朝鮮半島に秦の時代に逃亡してきた人々がいて、やがて、出雲に渡来して国を築いた。記紀ではイザナミとして著され、後継がスサノオであった。スサノオは出雲から九州地区を連合し、天照大神を宇佐に幽閉した。
- iv) スサノオの子の大歳尊はスサノオから九州の覇権を引継ぎ畿内に進出し、「大和国」を築いた。ニギハヤヒと名乗った。更に、東海・東国へも進出した。
- v) 天照大神は二ニギ（オオナムジ）によって幽閉から救出され、出雲からの覇権奪還作戦を展開することになる。これを記紀は国譲りと描いた。

さて、いよいよ舞台は邪馬台国の時代になる。既に何度も記述しているように、邪馬台国のこと、卑弥呼のことなどは記紀などに殆ど記述がない。このことが、徐福一行の末裔が邪馬台国を築いたことを示しているのではないかと既述した。ここでは、そのことをもう少し掘り下げて検討してみたい。

イ) 倭国大乱の考察

「後漢書」の記述によれば、紀元 57 年に倭奴国王が後漢光武帝より金印を賜った。紀元 107 年には倭国王帥升等が生口 1 0 6 人を献上し（後漢帝に）請見を願った。紀元 1 4 6 年から 1 8 9 年（後漢桓帝～靈帝の時代）倭国が乱れた。長いこと王が居なかったが卑弥呼を共立して収まった。魏志倭人伝によれば、倭国本亦男子をもって王となす。住まること 7 0 ～ 8 0 年、倭国乱れ、相攻伐すること歴年、共に一女子を立てて王となす。名を卑弥呼という。紀元 2 3 8 年女王卑弥呼が魏に朝献し金印を賜る。

後漢書を例にとれば、紀元 6 6 年頃から 1 4 6 年頃までは男子王が倭国を治めていた。そして倭国大乱が発生、卑弥呼の共立は紀元 1 9 0 年頃となる。

上記のことを時系列にまとめると次のようなことになる。即ち、紀元 5 7 年前後から奴国が北九州中心に覇権を主張していた。しかしながら、その 5 0 年後にはどこか近隣の国王が台頭してきた。そして、紀元 1 4 6 年頃から倭国は大いに乱れ、長期間統率者がいない状態が続く。そこで、卑弥呼を共立して王となし、大乱が収まるのである。

上記の流れから倭国大乱の舞台は北九州ということになろう。問題は台頭してきた倭国王がどこの誰かということである。この頃出雲を中心に四隅突出型墳丘墓が出現する。この勢力が倭国王帥升の可能性が高い。「古事記」が描くオオクニヌシの国造り譚はこのことを著しているものと考えられる。大塚初重氏が四隅突出型墳丘墓の故地は高麗ではないかと主張され、その原型を積み石塚に求められている。とすれば、この文化を運んで来た神こそ、天羅摩船に乗ってやってきた少彦名神ということになる。こうして強化したオオクニヌシ出雲は、余勢をかって吉備、畿内、九州へと進出する。この九州

進出で奴国などと激突したことが魏志などに描かれる倭国大乱というものであろう。

魏志に記述される「狗奴国」は女王国の南に在りとされるが、後漢書では海を渡って東千里のところに「狗奴国」があると言っている。この頃、九州の主要国が総がかりで当たっても凌駕できないような国と言った時、それが九州内にあるとは考えられない。それは矢張りオオクニヌシ出雲ということになるのだろう。

ロ) 卑弥呼の考察

卑弥呼の原像ではないかと思われるものが沖縄に残っている。2000年12月に世界遺産登録された「琉球王国のグスク及び関連遺産群」の一つ、斎場御嶽（せいふあうたき）である。この斎場御嶽を管掌したのが間得大君（きこえおおきみ）、「最も名高い神女」という意味で琉球の信仰における最高位の呼称である。琉球王国最高位の権力者である国王と王国全土を靈的に守護するものとされた。そのため、王族の女性が任命され、琉球全土の祝女（ノロ）の頂点に立つ存在でもあった。この斎場御嶽からほど近いところに「久高島」がある。琉球開闢の祖アマミキヨが降りてきた島で、五穀発祥の地とされており、王朝の神事も行われている。となれば、これを遡る時代に中国からの渡来があり、その文化が引き継がれていることが想像される。

この間得大君（きこえおおきみ）の文化が沖縄から九州に伝わったか、或いは徐福一行が帯同してきたかは明らかではないが、明らかなのはどうも原点は中国であり、それが九州に伝わり、邪馬台国において卑弥呼として現れたということではないだろうか。

魏志の伝える卑弥呼像は、“鬼道につかえ、よく衆を惑わす”ということであるが、邪馬台国一国のことなら理解できるが、九州地区広域で認知され、女王に共立されたということは何を意味するのだろうか。それは、九州地区の多くの国々が同様の宗教観を有していたということになるのではないだろうか。だから受け入れられた。しかしながら、出雲オオクニヌシは違っていた。見たこともないような四隅突出型墳丘墓を造る集団だからである。その人たちが九州に進出してきた。だから、到底受け入れられるようなものでなく、遂には戦争状態になってしまったのである。

ハ) 邪馬台国の考察

本稿では徐福一行の後裔が古代日本建国の祖であろうと考えて検討した結果、その根源地は日向（宮崎県）ということ突き止めた。そして、それは記紀が描く神武天皇の東征の出発地でもあった。では、この日向（宮崎県）は邪馬台国であったのだろうか。

先述のように、徐福一行が道教を携えて渡来したとすれば、後裔の卑弥呼が鬼道に事えるシャーマンとして現れたことはよく理解できるのではないだろうか。しかしながら、それだけでは、四隅突出型墳丘墓群を誇る出雲オオクニヌシや、古墳時代に入って王朝と言う名に恥じめ古墳群を形成した畿内とバランスがとれない。そのように考えた時、矢張り後の古墳時代に隆盛した地域が邪馬台国の有力な比定地になるのではないだろう

うか。

鬼道を携えて渡来した徐福一行の根源地日向（宮崎県）には後の古墳時代に西都原古墳群が形成されている。この西都原古墳群は全国でも屈指の規模とされており、このような規模の勢力が忽然と形成されたはずがなく、古墳時代を遡る時代から大いなる一國を誇っていたであろうことは想像に難くない。以上のことから本稿では邪馬台國を日向（宮崎県）に比定するものである。

最後に里程論との関係を少しだけ記述しておきたい。

- i) 帯方郡からの総距離が1万2千里についてはクリアできている。
これについてはNET論文「古代中国における地の測り方と邪馬台國の位置」（野上道男著）をご参照されたい。野上氏の分析では帯方郡から1万2千里のところが宮崎平野であり、古代の測量法によっても比定できるとされている。
- ii) 具体的な里程論については、伊都国以降は参問によるとの前提がつくが何とか辿りつくことができている。本欄の小稿「記紀は魏志を描いていた」をご参照されたい。そこでは投馬國を大分県に比定し、そこから海路又は陸路で邪馬台國（宮崎県）に辿り着くとした。
- iii) 難問は奴國以降邪馬台國までの残余の里数が1300里であることである。このこともあり多くの論者は北九州説を採る。しかしながら、魏志では“倭の地を参問するに、海中の洲島の上に絶在し、周旋5千余里ばかり”とっており、邪馬台國が九州島のどこに在っても範囲内ということになる。